慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	正統派経済学批判者としてのシスモンディ：特に彼れの恐慌論を中心として
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1930
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.24, No.9 (1930. 9) ,p.1479(143)- 1527(191)
JaLC DOI	10.14991/001.19300901-0143
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19300901-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

斯くの如きが自由放任論及び社會政策論の對照である。政策理論としての當否はいづれにあるか、之れは當然、經濟學が規範的科學なりや否やの問題とは別問題である。經濟學には倫理的價値判斷的動機が加はらぬと云ひ、加ふ可しと云ふ論爭に對して下された批評は、そのまゝでは、政策理論の論爭に適合するものではない。此の兩政策理論、いづれの行方を以つて是とするやに就いての斷案は今暫らく、之れを避ける。政策論は、一方、諸般の現實的事情や他の動機の作用を考察する必要があると共に、各〻有する理想によつて導かれねばならぬ。しかし又、如何なる政策をたてるかと云ふ問題は、政策其のものの理論、政策とはどんなものか、政策理論は如何なる方法によるものか、の問題とは別である。前者は實際的諸政策の問題であつて後者は政策理論の科學的研究の對象である。自由放任政策と社會政策とは第一の點に於ける差別以外果して第二の點、即ち政策理論として、其の研究方法の行き方がどれ程迄異なるか、之れが殘された問題である。（了）

正統派經濟學批判者としてのシスモンディ

——特に彼れの恐慌論を中心として——

永田清

本稿は東京帝大に於るフランス學會講演會に於て用ゐたる講演草稿の一部に加筆補正を施したものである。

一　序言

シモンド・ド・シスモンディがリカアドオに答へた言葉に「何。然らば富が一切で、人間は絶對に何物でもないのか」（註一）といふのがある。この言葉は、彼れがアリストテレスより借り來つて正統學派の異名とした《l'école chrématistique》（註二）の意味を最もよく表明するものであらう。彼れは自己の主著に「經濟學の新原理」《Nouveaux Principes D'Économie Politique, ou De la richesse dans ses rapports avec la polulation》なる標題を掲げた。何故に新原理と稱するか。彼れは謂ふ、「稍〻漠然たるこの標題の爲めに、該書は單に新刊の經濟學入門書にすぎないと思はしめるかも知れぬ。けれども余の抱負は遙かに高い。種々なる理論の研究によつて余は經濟學を全く新しき基礎の上に建設したと信ずる」と（註三）。

註一　Simonde de Sismondi, Nouveaux principes d'Économie Politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population. 2 éd. 1827 tome II p. 331 note.

註二　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome I p. 17-18.

註三　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome I avertissement sur la 2 édition xiv.

彼れは正統學派によつて確固不動のものと考へられた諸原理を再び疑惑の中に投じた。その簡潔なるの故に又その法則の明快なる演繹の故に、人間精神の最も崇高なる創造物の如くに思はれた科學を動搖せしめた。遂に彼れは《une orthodoxie》を危險なる學理として排擊するに至つたのである（註四）。

註四　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome I Avertissement i 參看

シスモンディに於けるこの正統學派批判の態度は最初から明白なものではなかつた。一八〇三年の著「商業的財富論」が直接にスミスの影響をうけて書かれたものなることは有力なる學說史家の等しく認むるところである（註五）。彼れは、自ら語る如く、この書出版以來十五年間經濟學に關する著書を殆ど讀まなかつたが、產業革命と同時に起りつゝあつた經濟上の現實的變異に深く着目した（註六）。特に彼れは一八一〇年及び一八一五年「歐洲を見舞つた商業的恐慌」、彼れが現に伊太利、瑞西、佛蘭西に於て目擊し、且つ英吉利、獨乙、白耳義に於ても等しく現れて居つたところの工場勞働者の慘忍なる苦惱によつて强く動かされた」（註七）。即ち一八〇三年以來彼れが觀察したる事象はスミスの原理と一部相容れざるものの如くに思はれた（註八）。斯くして彼れは一八一九年、嘗て

Edinburgh Encyclopedia に寄せたる Économie politique（註九）なる論文を擴大して Nouveaux Principes d'Économie Politique, を著すに至つたのである。

註五　例へば H. Denis, Histoire des Systèmes économique et socialistes p. 284. Gide et Rist, Histoire des Doctrines économique, p. 205. Mombert, Geschichte der Nationalökonomie S. 374 參看。

註六　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome I Avertissment xx-xxj.

註七　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome I Avertissement xxij. H. Denis, op. cit., p. 285.

註八　H. Denis, op. cit., p. 286.

註九　この論文執筆の年をリストは一八一八年を記すも（op. cit., p. 205）ドニスは一八一七年を謂ふ（op. cit., p. 285-6）。

シスモンディは、「商業的財富論」に就て、「余はスミスの臆說を最も明瞭に說明し、然も彼れの思想に一物をも加えざりしことを誇とする」（註一〇）と謂つたが、この「經濟學の新原理」に於ても、「スミスの學說は又吾が學說である」（註一一）と稱して、再びスミスを祖述するかの如き口吻を洩して居る。併し乍ら、この言葉は其のまゝ受け容れることは出來ぬ。何故ならば、この意味は經濟學の研究をスミスより出發したと謂ふにすぎぬからである。即ち謂ふ、「スミスの天才が經濟學の領域を照した炬火は彼れの學徒をして正しき路につかしめた。この故に、彼れ以來經濟學に對して齎らされた一切の進步は彼れに歸せられる」（註一二）と。以下本論に於て明示する如く、「新原理」に於る彼れの結論はスミスの其れと異るところが多い（註一三）。彼れ自らも亦、其の初版序文の中に斯う謂つて居る。「余の觀察したる事象のあるものは、嘗て採用したる諸原理と相容れざるものの如く思はれた。これ

等の事象は余の理論に對して齎したこの新たな展開によつて直に分類せられ開明せられると思ふ。余が理論を推し進むるに從ひ、スミスの臆說に與へたる修正の重要性と眞實性とを確認するに從ひ、其れ迄經濟學上曖昧であつた總ての問題はこの新しき見地より考察されて明瞭となり、而して余の原理は曾て提出しやうとも思はなかつた困難を解決して呉れた」（註一四）と。

註一〇　Sismondi, 2 éd. op. cit., tome I Avertissement xix-xx.

註一一　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome I p. 50.

註一二　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome I p. 50.

註一三　H. Denis, op. cit., p. 286. 參看

註一四　Sismondi, op. cit., 2 éd. Avertissement xxj.

斯くの如く反對的態度を明示せる彼れの評言は稍〻感情的色彩を帶びて居る。「經濟學の目的はあらゆる階級の幸福を增進するに在る」、「正統學派は、物のために人間を、手段の爲めに目的を犧牲にした」、「貧者の生存は自由競爭の結果犧牲に供せられた」と謂ふが如き口吻は「新原理」及び其の後述作中の隨所に見出される。小經營の破滅、農村人口の減少、中間層のプロレタリヤ化、勞働者の貧困化、機械による勞働者の驅逐、失業、信用制度の危險、社會的對立、生存の不安、恐慌等の社會事象に面し、正統派經濟學に對して彼れの懷いた辛辣且つ深刻なる疑惑は、該學派の諧調的昏睡の飽和した樂觀主義の中に、恰も一つの鋭き不諧音の如くに突入して行つた。吾人は次の如き表現が如何に深刻にして痛しい印象を與へねばならなかつたかを容易に想像し得るであらう（註一五）。

「人間力を增加する機械の發明は、人類にとつての恩惠であるけれども、その利益の分配が不當であるならば、却つて其は貧者に對する禍となる」（註一六）。

「企業家の利潤は彼れが雇傭する勞働者を搾取したものに外ならぬ。彼れは、その企業が、費用以上の收穫を齎すが故に利得するのではなく、その費用を支拂はざるが故に、換言すれば、勞働者にその勞働に對して充分の報酬を與へざるが故に利得するのである。かくの如き產業は、一つの社會的罪惡である。何故ならば、勞働するものを極度の貧困に陷れ、然かもその指導者には資本の通常利潤を確保するが故である」（註一七）。

「吾人が奴隷時代を野蠻視すると等しく、新時代のものは、勞働階級に何等の保證を與へなかつたが故に吾人を野蠻視する時代が、疑もなく到來するであらう」（註一八）。

註一五　Rosa Luxemburg, Die Akkumulation des Kapitals 1913. S. 147. 益田氏邦譯一九六-七頁參照。

註一六　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome I xv.

註一七　Sisomndi, op. cit., 1 éd. tome I p. 92 2 éd. tome I p. 92.

註一八　Sismondi, op. cit., 2 éd. p. 435. Études sur l'économie politiqüe p. 92.

斯くて、彼れは《l'économie sociale》を建設し、社會政策を說いた。マルクスが「哲學の貧困」の中に於て、シスモンディを反動家と做し（註一九）、又「共產黨宣言」に於て、小ブルジョワ社會主義の巨頭と謂ひ（註二〇）、レーニンが彼れの學說を小ブルジョワ的同情より出來上つて居る經濟學的浪漫主義と稱し（註二一）、又ゾムバルトが彼れをカーライルと並立して『社會的』精神を說き立てゝ倦むこと

を知らない初期の『倫理的』國民經濟學者（註二九）と述べたのは、この意味に於て正しいのである。

註二九　Marx, Misère de la phylosophie p. 92 nouvelle éd. 1908.

註三〇　Marx-Engels, Communit Manifesto Kerr 版 p. 46. リヤザーノフ編邦譯一〇九頁。

註三一　レーニン「浪漫派經濟學批判」河野重弘氏邦譯八四頁參看。

註三二　Sombart, Sozialismus und soziale Bewegung 1920 S. 23. 林要氏邦譯「社會主義及び社會運動」（普及版）二五頁。

併し乍ら、リストの如く、シスモンディを「經濟學の體系中に感情の占むる地位を重大視した最初の人」（註二三）としてあげ、而して「彼れの著作の主たる興味は、彼れを感動せしめた事實に就て提出せる科學的說明にあるのではない」（註二四）と謂ふのは正しくない（註二五）。何故ならば、シスモンディの經濟倫理學、社會政策論は犀利なる社會組織の理論的分析、マルクスの口吻を藉りれば、市民的生產に於る矛盾の的確なる判斷（註二六）を基礎とするものであり、其の理論は決して、リストの論結するが如く、「淺薄なもの」でもなければ「曖昧」でもないからである。

註二三　Gide et Rist, op. cit., p. 205.

註二四　Gide et Rist, op. cit., p. 226.

註二五　手塚壽郎教授「シスモンヂの經濟理論」（商學討究第二卷上册）一―三頁參看。

註二六　Marx, Theorien über den Mehrwert Bd. III. S. 55. マルクス・エンゲルス全集（改造社）一一卷七〇頁

シスモンディに於るこの社會組織の理論的分析と社會政策論との關係に就て、マルクスは次の如く述べて居る。

「シスモンディは資本家的生產が自己矛盾することを痛感してゐる。即ち、それの諸形態、それの生產諸關係は、一方に於て生產力及び富の自由なる發展を刺戟する、ところが他方に於て、この諸關係が條件づけられたものであると謂ふことを、また生產力が發展すればする程、使用價値と交換價値との、商品と貨幣との、販賣と購買との、生產と消費との、資本と賃勞働との、その他等々の矛盾が、益〻大規模に現はれると謂ふことを痛感してゐる。特に彼れは、一方に於ては生產力の自由なる發展、及び同時に商品から成り立ち販賣されねばならぬ富の增加と、他方に於ては資本家的生產力の基礎として、生產者の大衆を彼れ等に必要な生活資料に局限せねばならぬこと、この根本的矛盾を感じて居る。それ故に、恐慌は彼れに於てはリカアドオに於るが如く偶然事ではなくて、益〻大規模に、そして一定の時期に於て現れる、內在的矛盾の本質的發露なのである。そこで、彼れは國家の力によつて、生產關係に適應せしめる樣に生產力を羈束すべきであるか、それとも生產力に適應せしめるやうに生產關係を羈束すべきものであるかに絕えず迷ふてゐる。その際、彼れは屢〻過去に逃避する、過去が一切の鎭靜劑となる。而して分配關係が外見上の生產關係にすぎぬことを理解しないで、資本との關係における收入が、或ひは生產との關係に於る分配が、別樣に規律されることによつて、その矛盾が押へられゝば猶ほ更結構だと考へる。彼れはブルジョワ的生產の矛盾を的確に判斷しては居る、けれどもそれを理解しては居ない、從つてまたその崩壞の過程を理解しないのである。併し乍ら、彼れの見解の根柢に橫つてゐるものは、事實に於て、資本的社會の胎內で發展するところの富創造の物質的及び社會的諸條件たる生產力に、その富を占有する新たなる形態が照應せざるを得ないと謂ふ豫感である、即ち、ブルジョワ的諸形態は、富がその中で何時でもたゞ

對立的な存在のの一時的な、而みを獲得し、また何處ででも同時にその對立物として現れるところして矛盾に充ちたものであると謂ふ豫感である。富はいつでも窮乏を前提とし、また窮乏を發展せしめることによつてのみ自ら發展するところのものである」（註二七）と。

註二七　Marx, Theorien über den Mehrwert Bd. III. Ss. 55-56. マ・エ全集（前掲）二一卷六九―七〇頁。

「シスモンディは經濟學の經濟學自體に對する疑を述べて、その終結を補完した」（註二八）。筆者が先づ「新原理」及び「經濟學研究」に於ける彼れの理論的分析の研究より出發し、特に正統學派との關係に於て其の理論體系を顧望せんとする所以である。而して彼れの方法論、價値論、人口論、社會政策論等は、この問題との關聯に於て極めて興味ある問題である（註二九）。併し乍ら、「シスモンディにとつては、生產と消費との均衡が國民經濟學の根本問題である。然かも、經濟學は諸科學中一般的福祉と人間の幸福とを直接の目的とする唯一の科學であり、その人間の幸福なるものは一に此の均衡に懸つて居る」（註三〇）。故に筆者は先づ彼れの恐慌論を中心としてその正統學派批判論を分析闡明するであらう。

註二八　Marx, Zur Kritik der Politischen Ökonomie, 1859 S. 39. 宮川寅氏譯「經濟學批判」叢文閣版六八頁

註二九　手塚壽郎教授「經濟學に於けるシスモンヂの方法」（國民經濟雜誌四十三卷五・六號）及び「シスモンヂの經濟理論」（前掲）猪谷善一教授「經濟學の相對性」六・七章參看。

註三〇　Diehl und Mombert, Wirtschaftskrisen (Lesestücke) Einleitung. 10.

二

通常シスモンディの恐慌論は過少消費說 Die Unterkonsumtionstheorie と稱せられる（註三一）。彼れに從へば、資本主義的生產方法は、消費を全然顧慮せずして無制限に擴張せられ、然かも、その消費は收入によつて限定せられるからである。即ち、彼れは恐慌の原因を資本主義的生產とこれに條件づけられた收入の分配との間に存する不均衡に看、而してこれより資本蓄積の問題に這入つて行くのである。

註三一　ディールは重なる恐慌論として、一、過剩生產說　二、過少消費說　三、マルクス恐慌論を擧げ、シスモンディとロオドベルトスとをこの第二の範疇にいれて居るが（Diehl, Theoretische Nationalökonomie Bd. II. Ss. 319-322）これは嚴密な意味に於ては正しくない。成程、シスモンディは一面消費財に着眼して居る。即ち、彼れに於る財の過剩生產は常にその消費に比較しての過剩である。乍併、彼れは他面資本蓄積の問題から生產財共れ自體の過剩を認めて居る。又、ディールがマルクス恐慌論の特質とする利潤率低下の理論も、可成り明瞭な形式に於てシスモンディに現れて居ることは本文に示す通りである。

彼れは「經濟學の新原理」再版序文の中に次の如く述べて居る。

「總ての現代經濟學者の認むるところに從へば、公の財產は私人の財產の集合體にすぎぬから、其は特殊な各人の財產に於けると同じ方法によつて發生、增加、分配、破壞せられる。私人の財產中考察すべき最も本質的なる部分は所得であり、又、消費、出費は所得に應じて統制さるべく、然らずんば資本を破壞するに至るであらうことを、彼れ等は知悉して居た。併し乍ら、公の財產に於て、一人の資本は他人の所得となるから、何が資本であり、何が所得であるかを決定するに困惑した。而して彼れ等はその計算より所得を全く除外するを以て最も簡單なる方法と考へた。セイ及びリカ

アドオは斯く本質的に決定すべき數量を無視して、消費は無制限な力であり、若しくは少くとも、其は所得によつて限定せられるけれども、消費の限界は生産のそれに等しいことを信ずるに至つた。彼れ等の示すところに從へば、生産される富は常に消費者を見出すであらう。而して彼れ等は、所得を有する消費者のみ考慮にいるべきを生産者に知らしむべきであつたに拘らず、生産者を激勵して、今日文明世界の困窮を釀したところの市場に於る斯る生産過剰を惹き起したのである」（註三二）。

（註三二）Sismondi, op. cit., 2 éd. Avertissement xij-xiij.

「生産せられた總ての富は常に消費者を見出す」と謂ふのは勿論セイの市場理論である。對立的地位に立つシスモンディの恐慌論を最もよく理解する爲めには、簡單にこの市場理論を考察する必要がある。

セイは先づ「生産物は生産物と交換せられる」と謂ふ意味を斯く説明した。

「物に何等かの效用を創造しこれに價値を與へんが爲めに産業を行ふ者が、此の價値の他人の尊重するところとなつて支拂を受くるに至らんことを希ひ得るは、他の人々が此の物品を獲得するの資力を有する場合に限られる。然らば、此の資力は如何なるものから成り立つか。曰く、他の價値、他の諸生産物、他人の産業、資本及び土地の所産から成り立つ。從つて一見矛盾する如くであるが、生産物に對して販路を拓くものは生産である」と（註三三）。而して彼れは、この命題を證明せんが爲めに、生産物は生産物と交換せらるゝの事實を次の如く説明する。「今、織物商人ありて『余が余の商品と交換に獲んと欲する所のものは他の商品ではなくて貨幣である』と謂ふものを假定しやう。而も此の商人をして、織物の買手は自己の商品を賣るにあらざれば商人に貨幣を以て支拂ふ能はざることを納得せしむるは容易である」（註三四）。即ち、セイに從へば、貨幣は交換の目的物ではなくて單にその媒介手段にすぎない。「この人が貨幣を欲する所以のものは、これを以て自己の産業に必要なる原料品又は生活維持に必要なる食料品を買はんが爲めに他ならないではないか。看よ、この人の必要とするものは生産物であつて貨幣でないことを。彼れの生産物の販賣に際して用ひられ、又、彼れの行ふ他の生産物の購入に際して用ひられたる貨幣は、一瞬間後には他の二契約者間に於て使用せられ、次いで第三、第四の契約者間に使用せられて窮る所なきこと、恰も車輛が、彼れの賣り出し生産物を運搬したる後に更に第二、第三の生産物を運搬すると同樣である。その生産物の販賣が容易でないとき、彼れはこれを以て購買者が自宅まで生産物を運搬すべき車輛を有せざるに基くと謂ふか。然り、貨幣は生産物の價値を運ぶ車に外ならぬ。……故に彼れにせよ、總ての人にせよ、それぞれ必要とする所の物を購入するは、一時或る金額に變形せられたる自己の生産物の價値を以てするものである」と（註三五）。斯くしてセイは謂ふ、「『貨幣稀少なるが故に賣れ行き思はしからず』といふことは、手段を原因と誤認する所以である。又其は殆ど總ての生産物が他の商品と換へらるゝに先立つて貨幣の形態に變へらるゝの事實より生じ、又、頗る頻繁に出現する商品は俗人の眼に最も優越する商品たるの觀を呈し、結局は媒介物に過ぎざるにも拘らず、總ての取引の終局目的たる觀を呈するの事實より生ずる所の一誤謬に陷る所以である。貨幣稀少なるが故に賣れ行き思はしからずと謂ふべきではなくて、他の生産物稀少なるが故に賣れ行き思はしからずと謂ふべきである。他

の價値にして眞實に存在する場合には、是れ等の價値の循環並に相互交換に用ひらるべき貨幣は常に充分に存在する。若し貨幣にして取引量に對して不足を告ぐるに至る場合には、これが補足は常に速かに行はれる。……或る過剰商品が何等の買手をも見出すことが出來ない場合に於て、この販賣を妨げるものは決して貨幣の不足ではない。……貨幣は賣買なる二重の交換に於て僅かに一時的の職分を行ふに過ぎぬ。交換が終了した曉に於ては、常に生産物に對する支拂は生産物を以てせらるゝものなることが發見せられるであらう」と（註三六）。

（註三三）J.-B. Say, Traité d'Économie Politique 6 éd. p. 138. 增井教授邦譯「經濟學」（經濟學古典叢書）二九九頁。

（註三四）J.-B. Say, op. cit., p. 138. 前掲邦譯二九九—三〇〇頁。

（註三五）J.-B. Say, op. cit., p. 139. 前掲邦譯三〇〇—三〇一頁。

（註三六）J.-B. Say, op. cit., p. 139-141. 前掲邦譯三〇二—三〇七頁。

セイは以上の如き販路の理論より更に進んで、一財貨の生産はその價値だけ他財貨に對する需要を增加すると謂つてゐる。「生産を完了したる生産物が其の瞬間より其の價値の全額だけ他の生産物に對して販路を提供するものなることは注目すべきである。思ふに、最後の生産者が一生産物を完了したる場合には、其の價値が自己の手中に在つて消失せんことを虞れて即座にこれを賣らんと焦慮する。然かも、彼れはこの販賣によつて獲る貨幣の價値が自己の手中に停止しないやうに、人手に渡すために等しく焦慮する。然るに其の貨幣を手離し得るは何等かの生産物を買はんと欲する場合に限られる。故に一生産物の形成せられた事實さえあれば、その瞬間より直ちに他の生産物に對する販路が拓かれるのである」（註三七）と。

（註三七）J.-B. Say, op. cit., p. 141-142. 前掲邦譯三〇七頁。

斯るセイの主張に從へば、市場に於る貨物の停滯、生産過剰、恐慌と謂ふが如き社會的事象は全く起り得ない筈である。然るに、事實上斯る現象が生ずるのは何故か。この疑問に就てセイは斯う謂つて居る。「斯く謂はゞ或は疑問を挾んで次の如く謂ふものがあらう、『或る時期に於て多量の商品が買手を見出すを得ずして流通界に堆積することがあるのは如何なる事情に基くか。何故に是れ等の商品は互に購買せられないか』と。余は此の問に答へる、個々の生産物の供給過剰は其の生産物が余りに豐富に生産されたるが爲めか、又は、他の生産者の生産が不足したるが爲めか、何れかの理由によつて其の生産物がこれに對する需要總量を超過したるに由つて生ずる。或る種の生産物が過剰なるは他の生産物が不足して居るからである。換言すれば、多數の人々が購買量を減じたるは、彼れ等が其の贏得する所を減じたるが爲めであり、其の贏得する所を減じたのは、其の生活資料の使用上に幾多の困難を生じたるが爲めか、或ひは、彼れ等がこれ等の資料を缺けるが爲めである」と（註三八）。以上がセイ市場理論の大要である。

（註三八）J.-B. Say, op. cit., p. 142. 前掲邦譯三〇八—三〇九頁。

斯くの如き市場理論に由れば、一部の生産物が過剰に生産せられることと、即ち部分的生産過剰は起り得るも、一般的又は普遍的なる生産過剰は發生し得ざるものである。シスモンディはこの一般的過剰生産不可能論を否定する。シスモンディの斯る否定論は一面彼れの所得學說を基礎として居

る（註三九）。

註三九　Rosa Luxemburg, op. cit., S. 149

彼れに從へば、「資本と所得との區別は社會に於て本質的なものであり」（註四〇）、而して「其は經濟學上最も抽象的にして且つ最も困難なる問題である」（註四一）。

「資本の性質と所得の其れとは絶えず吾人の思想の中に於て混亂して居る。甲者にとつて所得たるものが乙者にとつては資本となり、而して同一對象物が手から手へ移るに從つて次々に異つた名稱を受けることを吾人は知つてゐる。然かも、他方消費された財より離れるその價値は、之をある者は支出し、他の者は交換し、又ある者に於て其は對象物そのものと共に消滅し、他の者に於て再び更新され、而して循環と共に繼續するところの形而上學的數量の如きものである」（註四二）。

彼れに由れば、一切の富は勞働の生産物である。而して「所得は斯る富の一部分であるから、この共通なる泉原より生ずる筈である。併し乍ら、通常三種の所得が認められて居る。即ち地代、利潤、勞銀であつて、これ等は各、土地、蓄積せられたる資本、勞働の三源泉より生ずる」（註四三）。然らば資本とは何か。「孤立人の眼には、總ての富は欲望の起る場合の爲めに豫め蒐められたる貯藏物にすぎなかつた。併し乍ら、この貯藏物の中に於て二つのものが既に區別せられて居つた。即ち一は直接若しくは間接の使用に充る爲めに貯へられたる部分であり、他は新しい生産の爲めに必要とする部分である。斯くして小麥の一部分は次の收穫迄彼れを養はねばならなかつたし、播種の爲めに保存せられた他の部分は次年に果實を結ばねばならなかつた。社會の形成、交換の導入は、この播種の爲めの部分を無限に增加せしめた。資本と稱せられるものは即ち斯る富の一部分である」と（註四四）。斯くして彼れは資本の概念と社會的再生産の物的觀點とを結びつけんと試みた（註四四）。

註四〇　Sismondi, op. cit., 1 éd. tome I. p. 84. 2. éd. tome I. p. 83.
註四一　Sismondi, op. cit., 1 éd. tome I. p. 85-86. 2 éd. p. 84.
註四二　Sismondi, op. cit., 1 éd. tome I. p. 85 2 éd. tome I. p 84
註四三　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome I. p. 85.
註四四　Rosa Luxemburg, op. cit., S. 153.

今、社會人を中心とすればこの問題は如何うなるか。「社會に於ては、富者は貧者を勞働せしめることが出來る。耕作者は、次の收穫迄必要と思ふ總べての小麥を保有した後、手中に殘りし余剩の小麥を用ひて、彼れの爲めに土地を耕し、新しき小麥を作りたる者、又、麻を紡ぎ羊毛を織る者……等を養ふことが自己に便利であると考へた。斯くして、この耕作者は所得の一部を資本に轉化したのである。新資本は事實上この樣にして構成せられる。……即ち所得の一部を以て勞働を雇傭するとき、其は永續的な、增殖し行く、而して決して滅失することなき一個の價値となつた。これが資本である」と（註四五）。シスモンディの說明に於ては、單純再生産に於ても、又資本の蓄積に於ても、可變資本と不變資本との概念が明瞭でない。併し乍ら、彼れは資本の發生と其の蓄積過程とを的確に指摘して居る。即ち余剩價値は資本と勞働との交換――可變資本より發生し、資本はこの余剩價値の蓄積より生ずると謂ふのである（註四六）。

註四五　Sismondi, op. cit., 1 éd. tome I. p. 88-89. 2 éd. p. 88-89.
註四六　Rosa Luxemburg, op. cit., S. 154

續いてシスモンディは社會的總生産物に於る生産と所得とを異れる要素に分析する。「勞働雇傭者は耕作者と等しく生産的富の一切を播種の爲めに用ひない。彼れは勞働をより容易、より生産的ならしむるが如き機械に使用する。斯くて、富が繼續的に種々なる種類に分れるを看る。社會が蓄積したる富の一部分は、これをその占有者が、徐々なる消費によつて、勞働を最も有利ならしめるために、人間を盲目的な自然力によつて勞働せしめる爲めに使用する。固定資本と稱せられるのは即ち是れである。富の第二の部分は、直ちに消費され、而してそれが作つた製作物の中に再生産せられ、絶えず形體を變化しつゝも同一價値を保有するものである。これを流通資本と稱ぶ。而して最後に富の第三の部分は、この第二の部分より派生したものであつて、完成せる製作物から、それを作るために用ひた元資を差引きたる過剰價値である。資本の所得と稱せらるゝものは是れであつて、この價値は再生産せらるゝことなくして消費さるべきものである」と（註四七）。斯くの如く、シスモンディは社會的總生産物を不變資本、可變資本、及び余剰價値なる範疇に分割し、而して消費を中心とする富の運動を以て極めて抽象的であり、且つそれを把握する爲めには大なる注意力を必要とすると謂つて居る（註四八）。

註四七　Sismondi, op. cit., 1 éd. tome I. p. 93-94. 2 éd. tome I. p. 93-94.

註四八　Sismondi, op. cit., 1 éd. tome I. p. 94-95. 2 éd., tome I. p. 94-95.

洵に資本の蓄積は社會の生産を無限に增大せしめ得る。併し乍ら資本化されたる余剰價値の販路、社會の消費は無限に增加し得るであらうか。シスモンディに從へば、「社會人の欲望は其の勞働が無限に種々なる享樂を提供するが故に、限り無きものの如くである。人は如何に多くの富を蓄積したとしても、『これで充分である』と謂ふ機會には到達せぬであらう。常にこの富を享樂に換へ又少くとも、自己の使用に充つるの手段を見出すであらう。併し乍ら、現代經濟學者の大部分が陷つて居るやうに、消費を以て何等の限度も無き、常に無限の生産を消化せんとしつゝある力と思惟するは大なる誤謬である」（註四九）。然らば社會の消費は何に依つて局限せらるゝか。この重要なる問題を決定するものに彼れの所得論がある。

註四九　Sismondi, op. cit., 1 éd. tome I. p. 77-78. 2 éd. tome I. p. 75-76.

シスモンディに由れば「國民所得は年々の生産に含まれるものと然らざるものとの二部分より構成せられる。前者は富より生ずる利潤であり、後者は生活より生ずる勞働能力である。富なる名稱のもとに於て、吾人は今土地所有並に資本を理解し、利潤なる名稱のもとに於て、その所有者に與へられる純所得並に資本家の利益を了解する。……これと同樣に、年々の生産、即ち其の國に於る總ての年勞働の成果は、二つの部分から成り立つ。其の一は、前述せる如く、富より生ずる利潤であり、他は、富と交換に與へられる勞働能力、即ち勞働者の生活資料に等しと想定せられるものである。斯くして、國民所得と年々の生産とは相互に平衡するものであり、……年々の所得の全體は年々の生産の全體と交換に與へらるべきものである」。（註五〇）斯くの如く、彼れは、價値の點より見て、社會的總生産物を可變資本と余剰價値とに分析し、續いて、消費による生産の、所得による支出の決定を論ずる。

註五〇　Sismondi, op. cit., 1 éd. tome I. p. 104-106. 2 éd. tome II p. 104-106.

「一國の所得はその支出を制規しなければならぬ。前述せる如く、この所得には二個の性質があつて、一は富者に於る物質的利潤、他は貧者に於る勞働能力である。富者は、自己の所得を生ずるところの富に基く利潤を、自己の欲望若しくは願望を充足すべき如何なる消費對象物と交換すべきかを熟慮しなければならぬ。併し乍ら、若しその所得を越えてこれを行ふならば、必然、その利潤を產むところの富よりなる資本それ自體に就て借入を行はねばならなくなり、將來に於る自己の利潤を減じて破滅を導くに至る。他方、所得としてその勞働のみを有する貧者は、これを支出するに先立つて、富者階級に依存して居る。彼れ等は、斯る勞働を實現しその果實を享樂し得る前に、これを賣らなければならぬ。而して彼れ等は、富者の中、自らの爲めにその所得を費したる後猶ほ殘れる資本をもつて貧者と交換を行ふ者に對してのみ、これを賣ることが出來る。勞働能力はこの能力が使用せらるゝや否や一個の所得となる。……而してこの勞働能力が全部雇傭せられるとしても、需要力に從つて其の價値は增減する。この故に、貧者はこの勞力を賣却したる後に於てのみその所得を支出するであらう。然かも、彼れは、その勞働を賣却したる價格に從つて、其の支出を制規するであらう。この價格を越える一切の支出は……彼れ自身及び社會を破滅せしめ、又、此の價格の不足若しくは杜絕によつて蒙る一切の窮乏は、生命、健康又體力を害ふや否や直ちに將來の勞働能力を破壞するが故に……等しく社會を破滅に導くこととなる。斯くして、貧者も、富者と同樣、その支出をして、實現せられたる所得を越えざらしむべく、而して一切の社會的支出は社會的所得によつて制規されることとなるのである」（註五一）。

註五一　Sismondi, op. cit., 1 éd. tome I. p. 112-114 2 éd. tome I. p. 113-115.

斯くの如く、一方に於て消費の高は所得の高に制限せられざる可らずと說くシスモンディは、他方に於て、「一國の支出は消費に向けらるゝ基本中その國の生產全體を吸收しなければならない」（註五二）と謂ふ。「人間勞働の唯一の目的はその欲望を充すに在るのであつて、使用にあてられたる生產物のみが價値を有する。……而して富が斯る目的を達せざる場合には、其はこれに代るべき等量の再生產を妨げる」（註五三）と。是れに關し、孤立人に就ての彼れの說明を避け、直ちに社會人を中心とする再生產と消費の問題に移らう。「社會に衣食住の不充分なる個人が多數に存在する場合、社會の欲するところはその購買し得るものに限られ、而して其の購買し得るところはその所得に限定せられる。今若し、社會の爲め、富者が自己の資本所得より取立てる以上の奢侈品が生產されるとすれば、富者は恐らくそれ等を取得せんと望み、それより新しき享樂を抽出し得るの方法を認めるであらう。けれども、彼れ等は破滅の危險を冒してこれを購買しないであらう。何故ならば、その爲めに自己の資本に就て借入を行ひ、換言すれば、貧者の現實所得のみならず自己の將來所得をも削減しなければならぬからである。從つて、斯る奢侈品を生產したる者も亦、富者の所得と交換し得ず、又その資本を回收することが出來ずして、その生產を再開することが出來なくなる。斯くして彼れの勞働は停止せられるであらう。又若し、貧者が、消費し得る以上ではなくてその勞働と交換に所得より取得し得る以上に、彼れ等の爲めに生活必需品が生產されるとすれば、疑もなく彼れ等は生活を向上せんとの强き希望を持つであらうが、事實はそうしないであらう。何故ならば、彼れ等が斯く望むの故

を以て、富者は彼れ等に一層高率の勞銀を提供せず、又一層多くの勞働を彼れ等より要求せざるが故である。即ち彼れ等自身より謂へば、勞働より外交換に與ふべきものなく、又若し少額の消費基金があるとしても、その爲めにより貧しくなるからである。從つて小麥は饑餓に瀕しつゝある多數の人々を前にして賣れずに殘り得るし、而して生産者は、資本を回收することが出來ぬから、勞働を停止すると等しく再生産の爲めに投資し得なくなるであらう。時として、生産過剰が價格の低落によつてより大なる消費を導くことはある。併し乍ら、その結果はより有利ではない。若し生産者が富者の所得を越ゆること二倍の奢侈品を市場に齎し、之を賣却し盡さんとせば、これ等の價格を半減しなければならぬ。この場合、富者はより安く購入し得るが故に消費者として利するところがあつたと信ずるであらう。けれども、富者の中には生産者が含まれて居るから、富者は消費者として利する以上に生産者として損失を蒙ることとなる。年生産の販賣に就て五割の損失が彼れ等の資本及び所得に及び、而してその所得の減少は次年度の消費減少を、その資本の減少は貧者の勞働に對する需要の減退を來すであらう。又、若し生産者が勞銀の價値に二倍する生活必需品を市場に齎すときは、この勞働の價値でこれを全部賣却しなければならぬから、五割の損失となるであらう。成程貧者はこの年だけは消費者として利するであらうが、生産者に於る所得の源泉たる資本の價値半減は……勞働需要を減じ、……從つて貧者の所得たる勞働の價値は半減するであらう。斯くの如くして所得によつて制限せられる一國の支出は消費基本の中に生産の全部を吸收しなければならない」（註五二）。

註五二　Sismondi, op. cit, 1 éd. tome I. p. 112 2 éd. tome I. p. 113.

註五三　Sismondi, op. cit, 1 éd. tome I. p. 112-119 2 éd. tome I. p. 113-119. この部分の説明に就ては、増井教授「生産消費の均衡に關する論爭」（本誌一九卷四號）四七—五三參看。

然かも、自由競爭の專ら行はれる資本主義社會に於ては、必然、資本蓄積の爲めの機械採用が行はれ、從つて過剰人口による勞銀の低下、財貨需要力の減退は自ら生産過剰に導くことにならざるを得ないと謂ふ。

「分勞は絶えず生産力を增加し、資本の增殖は新しき用途を求めねばならないから……生産者は自己の市場擴大を最大の緊要事とする。……而してその財産の增大は總て販賣の擴大に依存する。この故に、商人は新しい所得に對する交換が自己に提供せらるゝ場合には、同業者を犧牲にしてその販賣を擴大せんことに熱中し、富の增加をこれに比例せしめんとする。……又製造者は勞働若しくは材料の使用に何等かの節約を見出さんと絶えず注意する。然るに材料はそれ自體前勞働の生産物であるから、彼れの節約は結局常に同一生産物に對して、より少量の勞働を雇傭することに歸せられる。……個別的に考ふれば、製造者の目的は、一部の勞働者を解雇することではなくて、同數の勞働を雇傭し且つより以上の生産をあげることである。然し、社會的に見れば、他の製造者が直ちにこれに倣ふが故に、結局新機械が勞働の生産力を增加しただけ、誰かが自己の勞働者を解雇しなければならなくなり、……全體としての彼れ等の消費はそれだけ減少するであらう。斯くして舊式生産業は沒落して行く。洵に消費者は競爭の結果利益を得るであらうが、斯る利益は勞働の減少と比肩すべくもない。……この故に發明の結果は、總ての者に對する損失、一國所得の減少となり、その爲め

に次年の一般消費力をより弱めることになるであらう。……今日迄、新しき方法の發見は大なる國民損失、所得の從つて消費の大減少を生じた。其れは然うならざるを得なかつたのである。何故ならば、勞働其れ自體が所得の重要なる一部分を構成するから、需要勞働を減少することは當然國家を貧窮ならしめる所以だからである。……然らば人間勞働を節約する技術の發見は總て、一部の人類に對して常に不幸であるか。勿論然うではない。人間によつて充足し得ざる勞働がある場合、これが機械によつて完成せられることは幸である。人間勞働が全部雇傭せられ、且つ生産が機械によつて行はれるならば、社會は利益を享るであらう。併し乍ら、斯る利益は機械が人間に代置することによつてのみ獲得し得られるから、其は結局人類の災厄である」（註五四）。

この點につき「新原理」再版には猶ほ次の如き説明が加えてある。「人間の勞働力を倍加する技術の發明は……皆役に立つが、其は消費との關係に於てのみ有用に使用せられる。消費者がより多量なる生産物を欲求する場合には、發明は同量の勞働を以て其を取得せしめるが故に有用である。又若し消費者がより大なる生産物を欲せざる場合には、發明は生産者に對して一層永き休息を與ふるから猶ほ有用であらう。……社會はより大なる生産力の獲得によつて苦しむのではなく、其の惡用に惱むのである。」(Sismondi, op. cit., 2 éd. tome I. p. 349-350)

註五四　Sismondi, op. cit., 1 éd. tome I. p. 315-325.

「富の增加より生ずる生産が確實に消化し盡さるれば、この增加は社會を利する」。この事はシスモンディも充分に理解した。然し、資本主義社會に於る分配の不平等、資本の蓄積は、現實上販路を狹めて生産を過剩ならしめて居る。

「總ての人の安易及び享樂が殆ど平等なるか或は多數者が窮乏しつゝあるに少數者が豐潤に飽くかは、國民の幸福にとつて無關係のものではない。これと等しく、收益の分配も亦富の增加に無關係のものではない。享樂の平等は其の結果として生産者の市場を常に擴大すべきものであり、その不平等は常に益〻其を縮少せしむることゝなる。同一收益は富者及び貧者によつて等しく消費せられるけれども、其の消費態樣は同一でない。富者は貧者よりも資本を用ふること遙かに多く、勞働を投入すること極めて尠い。從つて殆ど富の再生産に資するところがない。……十萬リーヴルの所得が一人に屬しやうと百人に分たれやうと、等しく消費に向けられることに變りはない。然し斯る消費は同一性質のものではない。極めて富裕なる者は無限に多くの物を使用するに非ずして、一層良質のものを需要し、……斯くして不生産的勞働者に賃銀を支拂ふことゝなる。……又、この所得が百の家族に分たれて居る場合には、一層良質の麵麭・肉を食ひ、葡萄酒・麥酒を呑んで其の國の農業を促進せしめるであらう。又、一層品質の優れたる內國製の衣服を纏ふであらう。……斯くして國內工業に發展力を與へるに至るであらう。若し同一所得の大部分が一人の富者に專有せられ、殘額が九十九人の極貧者に分配せられる場合には、一國産業に對して與へらるゝ刺戟は右の場合よりも遙かに弱いであらう。……資本蓄積の結果は一般に勞働を大工業に集中せしめるが、巨大なる財富集積の結果は斯る大規模産業の生産物、從つて富の消費を殆ど絕對的に排除することとなる」（註五五）。

註五五　Sismondi, op. cit., 1 éd. tome I. p. 331-335　2 éd. tome II. p. 357-361.

斯くの如く、資本家的生産關係は一方に於て資本の蓄積、富の生産力を刺戟するが、それと同時に、消費と生産との均衡は必然的に破れて生産過剩を來すと謂ふ。斯る國內恐慌の理論は同一過程に

於て世界恐慌の説明となる。

「以上の如く、財産が少數所有者の手中に集中せらるゝ爲め、國内市場は常に益〻狹められる。從つて常に産業は益〻販路を外國市場に求めざるを得ざるに至るのであつて、……生産が消費を越ゆる國は總て等しく外國市場に注意を向けることになる。……併し乍ら、世界市場に於ても亦事情は國内市場の場合に等しい。……世界販路の擴大は世界的繁榮の結果としてのみ可能となり、而して消費は新所得の額に限定せられる。……然も各國の消費力は、前述せる如く增進することが出來ぬ。生産は消費を越え、製造は資本額に比例して需要に比例せず、然かも、商人は新販路に向つて殺到して順次に沒落し行くの事實は、種々の商業報告、新聞、旅行者の談話によつて明白である」（註五六）と。

註五六　Sismondi, op. cit., 1 éd. tome I. p. 336-338. 2 éd. tome I. p. 361-364. 增井教授前掲論文五四―五八頁參看。

斯くしてシスモンディは、「消費生産の不均衡、生産者の沒落過程」と謂ふが如き極めて明瞭なる眼前の活事實を、正統派經濟學者は何故に理解しやうとしないのかと反問し、彼れ等の誤謬は彼れ等が年々の生産と所得とを同一視するに在ると述べて居る（註五七）。「リカアドオはセエに從つて斯う謂ふ――セエ氏は、抑も需要は獨り生産に依つてのみ制限せらるゝものであるから、如何なる資本額も一國内に於て使用し得られぬことはないといふことを、遺憾なく説明した。何人も消費する爲め、若しくは賣却する爲め以外に生産を行ふものでなく、而して彼れは直接己れに取つて有用であるか、或は將來の生産に貢献し得べき他の何れかの貨物を購入する意圖を以てするの外、決して物を賣却するものではない。されば生産を行ふことによつて、彼れは必然彼れ自身の財の消費者となるか、或は他の誰れかの財の購買者且つ消費者となるかの何れかである（註五七）と。併し乍ら、此の原則を以てしては、商業史上最も確實なる事實、即ち市場閉塞を了解し又説明することは絶對に不可能となる。且つこの原則に從へば、セエ及びリカアドオが價値及び富なる名辭に與ふべき意義に就て相互に接近すると謂ふ矛盾より脱却し得ず、又、生産は增加しつゝあるに資本利潤及び賃銀は屢〻同時に低落することある所以を説明することが出來ない。年々の所得を年々の生産物と混同することは經濟學全體を蔽ふに厚き幕を以てする所以に外ならぬ。この兩者を區別するとき、初めて一切は明瞭となり、總ての事實はその理論と一致するのである」（註五八）。

註五七　David Ricardo, On the Principles of Political Economy. I. ed. chap. XIX. pp. 399-400. III. ed. chap. XXI. p. 339. 小泉教授譯「經濟及租稅原論」（經濟學古典叢書）四二七―四二八頁。

歐洲に於る資本支配の無遠慮なる擴大に對するカッサンドラの如き呼び聲は彼れに對する反對論を三方面に惹き起した。即ち英吉利に於るリカアドオと其の學徒、佛蘭西に於るスミス學説の解説者ジー・ベー・セエ及びサン・シモン學派は共れである。産業組織の暗黑面、而して特に恐慌を强調した英吉利のオオエンの思想過程は、隨處にシスモンディの思想過程と相觸れるところがあるが、大工業發展に關する世界に誇る思想、人間勞働の生産力に於る無限の發展を强調したる他の偉大なる空想家サン・シモンの一派は、シスモンディの怒號に激しき不安を感じた。併し乍ら、ルクセンブルグも謂ふ如く、玆に吾人の興味を惹く點は、理論的見地に於て特に效果多き、シスモンディとリカアドオ學派との論爭である（註五八）。筆者は、斯る論爭を迎る準備として、このボレミークの中心と

なつた「新原理」初版（一八一九年）に於るシスモンディ恐慌論の大要を前述した。以下展開せられる論爭によつて、シスモンディに於る正統學派批判の態度は一層明瞭となるであらう。

註五八 - Rosa Luxemburg, op. cit., S. 161. 前掲邦譯二一三―二一四頁

三

一八一九年十月即ち「經濟學の新原理」出版直後、マカロックは Edinburgh Review 誌（Vol. XXXII.）上に匿名を以てシスモンディ批判を掲げた。元來この批判はオオエンに向けられたものであるが、同時にシスモンディの恐慌論に及んだ。而して其は生産力の增大に伴ふ消費力の必然的發展を論證せんとするものである。續いて、シスモンディは一八二〇年ロッシの「法學年報」に「消費力は社會に於て常に生産力と共に增加するやの問題に對する檢討」を掲げてこれに答へた。シスモンディはこの反駁文を認めた當時に於て前批評文の執筆者を知らず、單に「其の名を知らざる研究者」（註五九）と謂ひ、一八二七年「新原理」再版に採錄する時、初めて「この批評者がマカロックであることを其の後知るに至つた」（註六〇）と脚註に附言して居る。

註五九 Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 376.

註六〇 Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 376 Note.

シスモンディは先づ論爭の焦點を指摘し恐慌の重要性を說いた。曰く、「吾々二人の探究するこの眞理は現實上の環境に於て最も重要なるものである。この眞理は經濟學に於て根本的なものと考へ得る。一般的窮乏は、商業、工業、或は農業に於てさえも起り得る。その苦惱は極めて永續的であり、異常なものであるから、多數の家族に不幸を齎し、總ての人に不安と失望とを與へて、社會の組織其れ自體を危くするに至るのである。……この一般的沒落に對して二個の對立せる說明が與へられる。其の一は謂ふ、「市場に堆積せる過剩商品の總てを消費し、而して其の後生産を購買者の需要に從つて統制するときのみ平衡は再び確立せられ、而して平和と幸福とに再び歸るであらう」と。他は謂ふ、「生産に對してと同樣蓄積に對しても二倍の努力を拂ふとき、平衡が回復せられる。市場が溢れて居ると信ずるのは自らを欺くものである。事實は倉庫の半分が滿されて居るにすぎぬ。他の半分を滿さば、この新しき富は他と交換せらるゝことによつて商業に生氣を與へるであらう」（註六一）と。斯くしてシスモンディは自ら稱する如く（註六二）マカロックの批評を一句一句捉へて之を反駁して居る。

註六一 Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 376-377.

註六二 Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 378.

總ての商品は一個の供給を表現するのみならず、また自らも一個の需要を表現すると謂ふマカロックの主張に對してシスモンディは次の如く答へて居る。

「マカロックに從へば、『需要と生産とは眞に相關的且つ相互いれ換え得る名辭である。ある種の財の供給は他の財の需要を構成する。故に一定量の農業生産物に對する需要は、等しき生産費を要する工業生産物がこれと交換に提供せられる時に於てのみ存在する。而して他方、この工業生産物量に對する有效需要は、同額生産費を要せし農産物量が等價物として提供せられる場合のみ存在するのである』と。マカロックは價格のみを問題とし、其は專ら生産費に從つて確立せられると考へる。

……成程、生産者は生産費に從つて計算を樹てるが、購買者即ち其の需要者は、生産費に關係なき二個の動機――先づ欲望次に支拂手段に依つて決意する。これ等二要素の結合と其れ等の生産物との比例とが需要を構成するのであつて、この需要は生産價格より或は大であり或は小であり得る。……又マカロックは商業と消費なる極めて異つた二物を混同して居る。商業は生産物を配給することによつて需要に資するところあるも、決してこの需要を創造するものではない。……二人の生産者が生産物を賣却せんとする同じ熱心を以て市場に現れても、……究局の需要、有效需要なきこれ等商品の交換は却つて常に生産過剰の徵候となるのである」（註六三）。

註六三　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 378-381.

次にシスモンディは、「交換の爲めに市場に提供せらるゝ商品が、生産費に於て、從つて價値に於て等しき限り、一種商品の生産增加は等しく增加せる他種商品の購買に對する等價物を提供するものである」と謂ふマカロックの言を擧げ、これは、二種商品の欲望が同一比例に於て增加するが故に正しいと述べて居る。彼れはこの問題を具體的な社會關係に就て說明する。「マカロックは謂ふ――例へば一方、一人の農業家が百人の農業勞働者に衣食を給して二百人分の食糧品を生産せしめ、他方、工業家が百人の工業勞働者に衣食を給して二百人分の衣服を生産せしめるとする。然るとき、前者に於る百人分の余剩食糧品と後者に於る百人分の余剩衣服とは相互交換せらるゝであらう。即ち余剩食糧品は衣服に對する需要となり、余剩衣服は食糧品に對する需要を構成するであらう」と……この推理態樣は多くの誤謬を含むものであり、現實世界とは全く異つた假想世界を研究するものである。……先づマカロックは無益なる勞働を以て勞働者の消費を全く補償する再生産と想定して居る。……今二百人分以上の食糧品又は衣服が創造せられるとすれば、其は何處に於て消費せられるであらうか。……又、其の推理は生活に等しく必要なる物の間に於る交換の必然性を基礎として居る。……併し乍ら、相互に殘りなき完全なる交換が行はれるのは、食糧品及び衣服が常に等しく不分割の數量であり、且つ常に等しき努力又は犧牲によつて取得せられ、一單位として考察し得られる限りに於てである。……マカロックの想定したるが如き交換の必然性は勞働者が最惡の狀態に在り、最小量の衣服の爲めに最大量の勞働を提供する時に於てのみ生ずるものである。勞働者が斯る困窮狀態に迫られざる間は、彼れ等は何と交換せんと欲するかを檢討する。……斯る時マカロックの想定せるが如き必然的交換は起り得ないのである」（註六四）と。過剩生産の全然起り得ざるが如くに規制されたる生産構成の假說に對して、シスモンディは極めて深刻な現實的思考法を採つて居る。余剩價値の一部が資本化される場合、換言すれば、社會の所得を超過して生産が擴張せられる場合、過剩商品に對する購買者は何處に見出されるか。シスモンディは蓄積の問題を核心として現實的に現れる恐慌現象を說明しやうとするのである（註六五）。

註六四　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 384-388.

註六五　Rosa Luxemburg, op. cit., Ss. 165-166.

續いてマカロックは、「勞働のより巧妙なる適用及び機械の採用によつて」、勞働の生産性が二倍になる過程を斯う說明する――即ち「百人の勞働者に食糧品と衣服とを前拂ひする各千人の農業家は、

二百人分の通常食糧品と、價値に於てこれに等しい奢侈的食糧品とを保有し、又各工業家は、これと等しき方法によつて、二百人分の通常衣服の外に、同一生産費を要し、從つて二百人分の衣服に等しき交換價値を有する奢侈的衣料品を得るとする。この場合、衣食に關する生産と需要とが以前と全く同樣であり、農業家の自ら消費せざる奢侈的食糧品と工業家の自ら消費せざる奢侈的衣料品とが互に提供交換せらるゝことは明瞭である。故に此れ等の財貨は互に他に對する對價物となり、購買者となる。斯くして、商品の需要は正確に生産と比例して增加するであらう(註六七)と。マカロックは擴張再生産に於る余剩價値の問題を、奢侈品生産に於る余剩價値の使用によつて解決して居る。併し乍ら、資本蓄積の爲めの擴張生産より生ずる過剩生産物は誰によつて消費せられるか。シスモンディは玆に批評の焦點を向ける。曰く「これを需要し享樂するものは、資本家か、其れとも勞働者か。余剩の生産物、勞働の利益は誰の手に殘るであらうか。この問題は倫理上及び經濟上極めて重要である。前者より謂へば、新しき勞働發展の利益、一國の幸福を增進するが故であり、後者に於ては、消費者の數が消費の範圍に決定的影響を及ぼさねばならぬからである。先づ、勞銀が生産物の增加に正比例して騰貴するとすれば、勞働者は從來十二時間に由て得たところの勞銀を六時間の勞働によつて取得することが出來ることとなり、殘りの六時間を休息・享樂・修養にあつるか、若しくは從前通り働いて奢侈品を求めるか、何れかに決意しなければならぬであらう。故に奢侈品と奢侈品との交換完了の必然性は認められぬ。然し、勞働生産物の增加より利益を享ける者が勞働者に非ざることは、吾人の知悉するところであり、且つ經濟史の敎ふるところである。即ち賃銀は事實上增加せぬ。リカアドオも自ら、公の富を增加せんとするならば、賃銀を引上げねばならぬと謂つた。反之、經驗の示すところに依れば、不幸にも賃銀はこの增加と等しい率で殆ど常に減少するものである。然らばこの場合、一般的幸福として富の增加より生ずる結果は如何。マカロックは十萬の農業勞働者を勞働せしめて自らは享樂に耽る農業家、十萬の工匠を頤使して自ら豐裕となる工場主を想定する。この故に、奢侈の輕薄なる享樂の增加より生ずる幸福には、國民中の百分一がこれに與るにすぎぬ。この百分一の者は、全勞働階級が生産する過剩生産物を全部消費しなければならないが、今若し、機械の進歩、資本の蓄積によりこの生産が絶えず增大し行く場合でも、充分に消費し盡すことが出來るであらうか。マカロックの假定によれば、國民生産物が倍加する毎に農場主又は工場主はその消費を百倍しなければならぬ。幾多の機械發明によつて、今日國民の富が、生産費を僅かに償つた時代に於る富の百倍であるならば、各主は今日一萬の勞働者を生活せしむるに充分なる生産物を消費しなければならぬこととなるのである。嚴密に謂つて、一人の富者は一萬の勞働者によつて製造されたる生産物を消費し得るとしても、……同率の農業生産物を消費し得ぬであらう。……斯くて農業生産物は賣れなくなるであらうし、寧ろ彼れの全思想體系の基礎たる農業生産物と工業生産物との間の比例はも早や支持し得なくなるであらう」(註六七)と。斯くしてシスモンディは、奢侈品に對する資本家の消化能力は、勞働の生産性、從つて余剩價値の增大と比例することが出來ぬが故に、過剩生産即ち恐慌が起らざるを得ぬと謂ふのである。

註六六　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 391-394.

註六七　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 394-398.

マカロックは更に斯う述べて居る――「需要は常に生産に比例して増加すると謂ふ原理に從へば、無秩序なる商業の生ずる市場閉塞及び沈滯は之を説明することが出來ぬと反對するかも知れない。吾人は極めて容易にこれに答へるであらう――市場閉塞はある特別商品の生産が増加し、その對價として役立つべき商品がこれに比例して増加しない結果であると。各〻千人の農業家及び工業家が各〻其の生産物を市場に於て交換する場合、新に千人の資本家がこの社會に加はり、各〻百人の勞働者を耕作に從事せしめるとすれば、農業生産物は直ちに過剰となるであらう。何となれば、彼れ等の買ふべき工業製品の生産が同時に増加しないからである。然し、これ等の新しき資本家の半數が工業家となるならば、他の半數者の農業生産品を買ふ爲めに充分なる工業製品を創造するであらう。斯くて、平衡は再び確立せられ、各〻千五百人の農業家と工業家とは、以前千人づゝで交換を行つたと等しく容易に、相互の生産物を交換するであらう（註六八）と。シスモンディは、眼前に展開されたる世界市場の現實的推移變遷に論及してこれに答へる。

「未開國は開拓され、而して政治革命、金融組織の變化及び平和は、一擧にして、古き農業國の門戸に其の國の收穫と殆んど等しき船荷を齎した。……其の爲めに穀物の供給過剰となり、農業家は到るところに於て損失を蒙つて居る。……勿論新しき農業國がその市場となる時が來るであらうが、其れ迄には、數時代、恐らくは、數世紀を要するであらう。然らば、現在に於て、この農業恐慌を救ふ爲めには如何にすべきか。マカロックに從へば、新しき資本家の半數は工業家となるべきである。然し、かゝる勸告はクリミヤの韃靼人又は埃及の農夫に對しても眞面目には適用され得ないものである。今日未だ海外の諸地方に於て新しき工場を建つべき時期に達して居らぬ。この故に、古き農業者に地位を與へて平衡を再び確立しなければならぬ。併し乍ら……農業家を變じて工業家とすることは單純容易なる業に非ず、寧ろ工業を確立せんが爲めの資本は激甚なる競爭によつて全部吸收せられるに至るであらう」（註六九）と。斯くの如く、シスモンディは世界市場の擴張も亦困難の解決ではなく、却つて一層激烈なる恐慌を齎す所以を説いた。而して最後に、マカロックが「一種商品の生産にして他と獨立に増加するならば、市場閉塞、恐慌は生じ得べきも、一切商品が同時に増加するならば、其れ等は相互に購買し、生産の増加は需要の増加に等しくなる」（註七〇）と謂ふのに對して、シスモンディは斯う答へる。

「吾人は幾度となく、平衡は再び確立せられ、勞働は再び始まると敎へられた。併し乍ら、單一の需要は常に商業の現實的欲望を越ゆる一つの運動を起させ、而してこの新しき活動はやがて一層苦しき恐慌を伴つたのである」（註七一）と。恐慌の原因は遂に斯くの如くにまで根本的に理解されて居る。

註六八　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 398-399.

註六九　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 399-401.

註七〇　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 403-404.

註七一　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 405-406. Rosa Lusemburg, op. cit., S. 173.

四

シスモンディはリカアドオの一門下マカロックと斯くの如く論爭したるのみならず、リカアドオ自身とも親しく意見を戰す機會を得た。即ち一八二三年リカアドオが幾日かを瑞西ジェネーヴに送りしとき、シスモンディは恐慌の問題に就てリカアドオと討論し、而して其の結果を筆にして翌年五月 Revue encyclopédique tome XXXII. 誌上に「生産消費の均衡に就て」なる一文を寄せた。この間の消息をシスモンディは斯う語つて居る。――「リカアドオの長逝は彼れの家族友人にとつてのみならず、彼れの知識によつて照され、その崇高なる情操によつて温められたる總ての人にとつて深き悲しみである。彼れは其の晩年數日をジュネーヴに送つたことがある。其の際、吾々は互に反對の地位に立つこの根本問題に就て二三回意見を戰した。リカアドオは其の研究に優雅、直情、眞理愛好を附與した。これが彼れを傑出せしめた所以である。然かも彼の研究は其の門下生に期待され得ざるが如き明瞭性を有する。……然し、口頭の議論は、精確なる計量と幾分形而上學的考察との極めて困難なる結合を必要とする問題に就ては、不充分である。斯くて、今では貴重な思ひ出となつて居るところのこの會合に於て用ひた議論に幾分の整理と思索とを加えて茲に再錄するの必要を感ずるものである」（註七二）。

註七二　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 410-411.

今シスモンディ對リカアドオの論爭を顧るに先立ち、此の會合以前に於るリカアドオ自身のこの問題に關する結論を知る必要があるであらう。

リカアドオに從へば、勞働賃銀は久しく勞働者の生活費以上或は以下に停ることが出來ぬ。尤も、資本の蓄積が絶えず速かに行はれて、人口增加の勢が是に追及すること能はざるときは、勞働者の生活は久しきに亘つて裕福となり得るけれども、斯る蓄積は資本の蓄積其者を阻止する原因を中に包藏するから、其の蓄積力は必ず早晩人口增加力に追及せられ、從つて勞銀は勞働者及び其の家族の習慣上必要なる生活費に歸着すべき約束を有することとなる。而して、リカアドオは機械採用の爲めに人間勞働の一部分が不用となることを認めた。然し、斯くの如くにして職を離れた勞働者は容易に他に職を求むることを得べく、究極、機械採用の前と後とに於て需要せらるゝ勞働量には增減なく、勞働者も亦地主資本家と共に機械の發明に由る物價低落の恩澤に浴するの利益のみがあつて、失ふところがないと認めた。「リカアドオが始めて經濟學上の問題に注意を向けた時以來、常に彼れの意見は、勞働節約の效果あるが如き機械が何れかの生産部門に應用せらるることは、全體の利益となるものであつて、是れに伴ふ所の不便は、大概の場合に於て、勞働及び資本を一用途から他の用途に移すことに伴ふ所の不便に過ぎないものであると謂ふのであつた。彼れの目に映ずる所では、地主にして同額の貨幣地代を收むる限り、地主は之を費して購ふべき貨物の中の何れかの價格が低減せらるゝことに由て利益を受くべく、而して此の價格低落は機械使用の必然の結果であると思はれた。彼れの信ずる所に由れば、資本家も亦た正しく同樣に利益を受くべきものである。勿論機械を發明せるもの、若しくは之を最初に利用したものは、一時巨利を博することに由て附加的利益を享けるであらうけれども、機械の使用が普及するにつれて、生産せられた貨物の價格は、競爭

の結果、其の生産費迄下降すべく、其の曉には、資本家は、以前と同じ貨幣利潤を收得し、僅に消費者として、同額の貨幣收入を以て快適品及び享樂物の追加量を支配することを得しめられることに依つて、一般の利益に參加するに止まるであらう。彼れは、又勞働者階級も同額の貨幣賃銀を以て一層多くの貨物を購買する力を有する筈であるから、機械の使用に由て同じく利益するものであると考へた。彼れは又、資本家は以前と同量の勞働を需要し雇傭する力を有する筈であるから、其を新なる貨物が、或は少くも別種の貨物の生産に使用する必要は免れぬとしても、兎に角賃銀の引下は行はれぬであらうと思つたのである。初めリカアドオの見るところに從へば、一生産業に新機械が應用せられた爲め生産額增加し、而して生産物に對する需要が是と歩を共にせざるときは、勞働者の一部分は必然其の生産業から解傭せられざるを得ぬけれども、彼れ等を雇傭した資本は依然として存在し、且つ之を有する者は之を生産的に使用することを利益とするのであるから、此の資本は社會に取つて有用であつて、而して必ず需要あるに相違ない何等かの別の貨物の生産に使用せられるであらうと考へた」（註七三）。

（註七三）Ricardo, op. cit., 3rd. ed. pp. 466-468. 前掲邦譯五八一―五八三。

然るにリカアドオは、其の「經濟及租稅原論」第三版を出すに當り、新に機械論の一章を挿入して機械の作用に關する問題に就き舊說を改めた。機械採用の爲め資本の增加は必しも同比率に於て勞働に對する需要を增加せず、是が爲めに過剩人口が造り出されて勞働者の窮厄貧困に陷るべき事に着目して其の學說の悲觀論的色調を一層濃厚ならしめたのである。リカアドオの自ら記するところに從へば、「當初の意見は、地主と資本家とに關する限りに於ては依然として變易することがなかつたが」、勞働者に關する部分は熟考を重ねたる結果謬見として之を放棄するに至つた。「彼れは、機械を人間勞働に代用することが勞働者階級の利益に取つては屢〻極めて有害なることを得心するに至つたのである」（註七四）。然らばこの前日の謬見は何處より生じたるか。彼れは自ら謂ふ。「余の誤解は一社會の純所得が增加するときは、其の總所得も必ず增加するであらうとの認定から生じたものである」（註七五）と。「然るに彼れは今、地主及び資本家が其の收入を仰ぐところの一方の基金は增加しながら、同時に今一つの基金、即ち勞働階級が主として倚賴するところの基金は減少することがあり得ることを納得すべき充分の理由を認める。故に彼れの意見が正しければ、一國純收入を增加せしめ得べき同じ原因が、同時に人口を過剩ならしめ勞働者の狀態を劣惡ならしめ得るといふ結論を生ずるのである」（註七六）。素よりリカアドオは機械の使用が過剩人口を生ぜずして終ることあるを認める。曰く「收入を貯蓄して資本を增加せしむる力は、純收入が資本家の欲望を充たすことの能否如何に由らねばならぬものであるから、機械採用の結果たる諸貨物の價格低落は、欲望を同一なるものとすれば、必ず資本家の貯蓄餘力――收入を移して資本たらしむるの便易――を增加せしめなければ已まぬであらう。然るに、資本の增加と共に資本家は必ずより多くの勞働者を雇傭すべく、從つて第二次に於て職に離れた人々は、後に至つて一部分は雇傭せらるゝであらう。而して若しも機械採用の結果たる生産の增加が、從來總收益の形に於て存在した丈けの食物及び必需品を純收益の形に於て提供するに足るものである場合には、全人口を雇傭する能力は同一なるものが存在すべく

從つて必しも人口の過剰は起らぬであらう」（註七七）と。併し乍ら、結局彼れが結論として擧ぐるところに從へば、「勞働階級が懷ける、機械の使用は彼れ等の利益を傷けることが屢〻であるといふ意見は成心や誤謬に基づくものではなくて、經濟學の正しき原理に合致し得るものである」（註七八）。以上の説明に於て、リカアドオは「原理を明瞭ならしむる爲め、改良機械が突然發明せられ、且つ普及せらるゝものと假想して來た」。然し彼れに由れば、「事實上是れ等の發明は、漸次に行はるゝものであり、且つ資本を現在の用途より他に轉向せしむるよりは、寧ろ節約蓄積せられた資本の用途を決定する上に作用するものである」。資本家を促して機械採用を決せしむるものは、賃銀の騰貴である。「資本と人口とが增加する毎に、是れと共に食物は、其の生産が益〻困難となる爲め、一般的に騰貴するであらう。食物騰貴の結果は賃銀の騰貴となり、賃銀の騰貴は毎に貯蓄せられた資本を從來よりも大なる割合を以て機械の使用に投ぜしむる傾きがあるであらう。機械と勞働とは絶えず相競爭するものであつて、前者は屢〻勞働が騰貴する迄は使用せられ得ないものである。……勞働を騰貴せしむる同じ原因は、機械の價値を騰貴せしめない。從つて資本の增加と共に必ず其のより大なる割合が機械に投ぜられるのである。勞働に對する需要は、資本の增加と共に引續き增進するであらう。併し乍ら、其は資本の增加には比例せぬ。增進の比率は必然的に遞減するであらう」（註七九）と謂ふのである（註八〇）。

註七四　Ricardo, op. cit., 3rd. ed. p. 468. 前掲邦譯五八四頁。

註七五　Ricardo. op. cit., 3rd. ed. p. 469. 前掲邦譯五八四頁。

註七六　Ricardo, op. cit., 3rd. ed. p. 469. 前掲邦譯五八四頁。

註七七　Ricardo, op. cit., 3rd. ed. pp. 471-472. 前掲邦譯五八七—五八八頁。

註七八　Ricardo, op. cit., 3rd. ed. p. 474. 前掲邦譯五九一頁。

註七九　Ricardo. op. cit., 3rd. ed. pp. 478-479. 前掲邦譯五九五—五九六頁。

註八〇　小泉教授「リカアドオ研究」四七七—四八七頁參看。

リカアドオをして斯くの如く其の説を改むるに至らしめたものは何か。マルクス及びディールは前記「經濟及び租稅原論」第三十一章の機械論中に引用せらるゝジョン・バアトンの小冊「社會の勞働階級の狀態に就て」（一八一七年）であらうと謂ふ（註八一）。然し、機械の使用が屢〻勞働者の利益を傷けると謂ふ意見は成心や誤謬に基づくものでなくて經濟學の正しき原理に一致せるものとなす見解は、シスモンディの「新原理」第四篇第七章「分勞と機械に就て」及び第七篇第七章「機械の發明によつて過剩にせられたる人口に就て」の中に於て既に反復力説せられたところである。且つ新に機械論を加えたリカアドオの原論第三版が現れたのはマカロック對シスモンディの論爭が行はれた後のことであるから、ルクセンブルグがこの點に於るシスモンディの影響と功績とを主張するのは故なしとしない（註八二）。考證粗雜の嫌はれるが姑くシスモンディの直接的影響なしとするも、兎に角、リカアドオが機械採用の問題に就てシスモンディに接近したことは否定出來ないのである。

註八一　Marx, Theorien über Mehrwert Bd. II. Teil II. S. 352.
Diehl, Erläuterungen. Bd. II. S. 425. リカアドオ自らバアトンに就て次の如き註を加えて居る。「余の信ずることろによればバアトンは『社會の勞働階級の狀態に就て』なる著作に於て、固定資本の增額が勞働階級の狀態に及ぼす

影響の或者に關する正しい見解を採用して居るものである。氏の論文には多大の價値ある報道が含まれて居る」と（三版四八〇頁）。

註八二　Rosa Luxemburg, op. cit., Ss. 173-174.

併し乍ら、資本蓄積と恐慌の問題に就ては依然として彼れ等は相對立した。ジュネーヴに於る討論の主題はこれであり、從つてシスモンディの「生産消費の均衡に就て」なる論文も亦これを對象とするものである。この一文によつて兩者のポレミークを辿らう。

周知の如く、リカアドオは其の「原論」の中にセエの市場理論を採り入れた。第二十一章に於て彼れは謂ふ、「セエ氏は、抑も需要は獨り生産に依つてのみ制限せらるゝものであるから、如何なる資本額も一國内に於て使用し得られぬことはないと謂ふことを、遺憾なく説明した。何人も消費する爲め、若しくは賣却する爲め以外に生産を行ふものでなく、而して彼れは直接己れに取つて有用であるか或は將來の生産に貢献し得べき他の何れかの貨物を購入する意圖を以てするの外、決して物を賣却するものではない。されば、生産を行ふことに依つて、彼れは必然彼自身の財の消費者となるか、或は他の誰れかの財の購買者且つ消費者となるかの何れかである。彼れがその志す所の目的、即ち他の諸財を得るといふ目的を成就する爲め最も有利に生産し得る貨物の何であるかを久しく善く知らずに居るといふことは、想像すべからざる所である。從つて、彼れが引續き需要のない貨物を生産するであらうといふことは、起らぬやうに思はれる」（註八三）と。從つて、リカアドオに從へば、「一國に於て、生産的に使用し得ぬほどの資本額が蓄積せられるといふことは、必需品騰貴の結果貨銀が騰貴し、從つて資本の利潤として剩さるゝものが、蓄積の動機を終息せしめるほど僅少となる時迄は起り得ぬことである。資本の利潤の高い限りは、人々は蓄積せんとする動機を有するであらう。或人が未だ充たされざる欲望を有する限り、其人はより多くの貨物に對する需要を有すべく、而して其人が是れ等の貨物と交換に提供すべき何等かの新なる價値を有する限り、それは有效需要となるであらう。……生産物は常に生産物又は勤勞に依つて購買せらるゝものであつて、貨幣は單に交換を行ふ媒介物たるに過ぎぬ。特定貨物が余りに多く生産せられ過ぎて、それに費された資本を償はぬ程の供給過剩が市場に起るといふことはあり得る。併しこれは、凡ての貨物に就いては有り得ぬことである」（註八四）と。

註八三　Ricardo, op. cit., 3rd. ed. pp. 339-340　前掲邦譯四二七―四二八頁。

註八四　Ricardo, op. cit., 3rd. ed. pp. 340-342. 前掲邦譯四二八―四三一頁。

シスモンディは既に「新原理」初版の中に於て斯るリカアドオの見解を論駁した。リカアドオ自身も當時恰も英吉利及び其の他の歐洲諸國を襲ひつゝあつた恐慌の事實は之を否定することは出來なかつた。唯だ、この事實を如何に解釋するかが、兩者に於る見解の相違點である。

シスモンディはこれに關して謂ふ、「歐洲全國に於て、現今一切の産業、農業も工業も、共に市場閉塞、販賣の不可能若しくは損失するに非ざれば販賣し得ざるの狀態に苦しみつゝあるの一事に於ては、リカアドオと余との間に意見の一致を見た。然し其の原因を余は生産の過剩、又は生産消費の不均衡に看、リカアドオは斯る過剩若しくは斯る不均衡を等しく不可能なりとなし、この結果を社會

組織の欠陥、生産物の流通に與へられたる拘束及び關税に歸した」（註八五）と。この場合注目すべきは、シスモンディとリカアドオとに於る前提の一致である。即ち彼れ等は、生産消費の均衡を論ずるに當り、共に對外貿易の問題を除外した。然かもシスモンディは資本主義的生産の擴大と共に、必然生じ來る對外貿易を通じての帝國主義を極めて明確に理解した。ルクセンブルグは、シスモンディの「産業は必然外國市場に販路を求めねばならなくなり、其處に於ては更に大ない變革に脅される」と謂ふ句を引用し、一八二〇年頃既に斯の如き事實を洞察したのは、資本の世界經濟的關係に對するシスモンディの深き眼識に映じたところの甚だ尊敬すべき貢献であつたと述べ、彼れの前提は、後年マルクスが世界市場全體を獨占的なる資本主義生産の行はれる社會と見た前提と全く同一である（註八六）と謂つて居る。

註八五　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 411.

註八六　Rosa Luxemburg, op. cit., S. 176.

斯る前提のもとにシスモンディはリカアドオ批判に進む。先づこの論爭に於てリカアドオの謂つた言葉を次の如く擧げる。「千袋の小麥を生産する百人の耕作者と千オオヌの織物を生産する羊毛工業者を想定し、又人類に有用なる他一切の生産物及びその間に介在するもの一切を度外視し且つ世界に彼れ等のみが存在するものとすれば、彼れ等は千オオヌと千袋とを交換することゝなる。若し産業の繼續的進歩の結果、勞働が十分一增大したとすれば、同じこれ等の人々は千百オオヌと千百袋とを交換し、而して各、彼れ等は一層勝れた衣食を得ることゝなる。更に産業が進歩すれば、千二百オオヌと千二百袋との交換が行はれる。以下同樣にして進むから、生産物の增加は常に生産者の享樂を增加せしめることとなるのである」（註八七）と。シスモンディに從へば、斯くリカアドオが簡單に表明したこの交換關係はそれ自體驚くべく複雜した問題である（註八八）。彼れはリカアドオの假設を其のまゝ認容すると共に、且つ競爭によつて其の賃銀が決定せられ、雇主が其の勞働を必要とせざるに至るや直ちに解雇せられるところの無産勞働者の存在する現實社會組織を考察する（註八九）。彼れは勞働技術に於てリカアドオの假定した變化は、社會的に見れば、結局に於て、生産性の增大に比例してそれに對應する部分の勞働者が解雇され、かくて吾人は一方に於て生産物の過剩、他方に於て失業と困窮、從つて現代社會の忠實なる表象を得るか、さもなくば、その過剩生産物が一つの新しき生産部門、即ち奢侈品生産に從事する勞働者を維持するために用ひられるか、その何れかに歸着しなくてはならぬことを指摘して居る（註九〇）。斯くして彼は謂ふ、「一個の新しき製造工業、奢侈品製造工業が建設せられる爲めには、新資本、機械据附、原料調達、遠隔地との取引活動が同樣に必要となる。併し乍ら、吾人は農業が必要とするよりも恐らく遙かに大なる新資本を何處に發見するであらうか。……事實上吾々の奢侈品製造者は衣食を得ることから猶ほ遙かに遠い。彼れ等は恐らく未だ生れて居ないのである」（註九一）と。續けて、彼れはこの不變資本の問題を農業の場合に適用し、リカアドオの抽象論を拒む。「農具若しくは農事に關する産業の發見によつて、その勞働者の生産力を三分一增加するの方法を發見する農業者が、搾取を三分一增進し、農具、設備、家畜、穀物置場を三分一增加する爲めに充分な資本と、收入の泉源たるべき流通資本を見出すであらうと思惟するのは時間を無

視するとゝなる」。（註九二）と。今、シスモンディのリカアドオ駁論を要約すれば、（一）、資本主義的現實世界に於ては、擴張再生產行程に客觀的困難の存在する爲め、リカアドオの漠然たる假說に於る如く爾く圓滑にこの生產行程は進行しない。（二）社會に於る勞働の生產性は、資本主義的條件の下に於ては、常に勞働者階級の犧牲と苦惱とによつて進められるものであると謂ふのである（註九三）。

註八七　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 416.

註八八　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 417.

註八九　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 417.

註九〇　Rosa Luxemburg, op. cit., Ss. 178-9. 前掲邦譯二三七頁

註九一　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 425-426.

註九二　Sismondi, op. cit., 2 éd. tome II. p. 429.

註九三　Rosa Luxemburg, op. cit., Ss. 179-180. 參看。

一八二四年五月 Révue encyclopédique 上に現れたシスモンディのリカアドオ駁論は遂に市場理論の主唱者セイをして論爭場裡に登場せしめた。セイは既にマルサス宛の書翰に於てシスモンディに答へたが、同年七月の同誌を借りて「生產消費の均衡に就て」なる一文を發表し、シスモンディに抗した。「若し人あり、人間社會は人の欲望を充足せしめ享樂を增加せしめ得る一切の物に就きて社會の消費し得る分量以上に生產することあり得べしと反對せば、余は是に對して、繁榮せるが如き國民に於てさえ、人口の八分七は生產物の必要量を欠くが故に、完全に給與せられ居る國あるを知らざるの事實は如何にして生ずるやを反問しやう。……一國に欠けたるものは消費者にあらずして購買手段である。シスモンディは、生產物が稀少であり從つて高價なるときは、是れ等の購買手段は一層擴大せられると信じ、斯る生產物の生產は勞働者に一層多大の賃銀を得しめると信じて居り、而して、生產が一層活潑であり生產物が一層豐富なるときは、國は一層よく一層普く給與せられると做す意見を攻擊して居る。然るに余は今この意見を是認せんとするものである」（註九四）と。

註九四　Revue encyclopédique, tome XXIII, Juillet 1824, p. 20. Zitiert von Luxemburg (Die Akkumulation des Kapitals S. 183) Œuvres Diverses de J.-B. Say p. 252-3 增井敎授前掲論文一二一—一二二頁參看。

次に、セイは生產の多々益々可なることを論じて生產過剩の起り得ざる所以を說く。「シスモンディに從へば、產業の進步は勞働者階級を犧牲として達せらるゝものである。併し乍ら、過渡の瞬間を過ぎれば、勞働者階級も等しく利益を享くることとなる。……蓋し價格の低落が販賣を容易ならしめるからである。生產者は如何にして、價格の低廉なるにも拘らず、同じ購買手段を有するか。それは、價格の低廉が賃銀支拂額の減少より來りしにあらずして、科學と技術との進步に基き、同一賃銀に對して一層多量の生產物を獲得するに至つたことに基くのである」（註九五）と。尤も、セイは生產可能性に對する極限を認むるに至つた。「或は、シスモンディは次の如く謂ふであらう——『然し、生產するの可能性には極限がある。假令、人の住居、衣服、娛樂、敎育に役立つ生產物が無限に增加し互に交換せられ得るとしても、最も必要なる食物は土地の面積に限られて居り、遠くより齎らすの必要を生ずるに從つて益々高く之に支拂はざるを得ざるに至る。果して然らば、生產することによつて儲け得る所得も、食糧品に益々高く支拂ふに不足するの點が來るであらう。斯くて人

口の新なる增加は不可能となるであらう』。余は此の點に於ては意見を同じうする」（註九六）と。

註九五　Œuvres Diverses de J.-B. Say, p. 253-254.

註九六　Ibid., p. 256.　前掲論文一二一—一二五頁參看。

シスモンディは斯るセイの論駁に對して再び反批判（註九七）を公し、前リカアドオ評の言葉を採錄してセイの理解足らざるを難詰して居る。

註九七　Notes sur l'articles de M. Say, intitulé "Balance des consommations avec les productions". (Nouveaux principes. tome II. p. 459-464)

五

以上の論戰を全體的に通觀れば、正統學派とその批判者シスモンディとの間に如何なる關係が認られるか。正統學派がポレミークの全體を通じて單純なる商品流通の概念より脫却し得ず、再生產及び蓄積行程をも W—G—W なる公式に還元せんとするに對し、シスモンディは、資本と所得、生產手段と消費原料とを社會的再生產行程に於るそれ等の相互關係に於て理解せんとするものである。ルクセンブルグの口吻を藉りれば、シスモンディがリカアドオに對して「何。然らば富が一切で、人間は絕對に何物でもないのか」と叫ぶとき、其處に單なる倫理的見解が認められるのみならず、現實社會と其の矛盾とに對する鋭利な眼識が看取せられるのである（註九八）。

註九八　Rosa Luxemburg, op. cit., S. 184.

シスモンディは資本主義的生產組織を說明するにガンダランの物語を擧げた（註九九）。而してあらゆる科學の應用は、このガンダランの斧に似た作用を以て、益〻多くの生產品をその消費量に關係なく機械的に市場へ持ち來すのである。然かも正統學派は過剩生產の論理的可能を認めない。彼れ等に從へば、欲望は數量に於て無限であり、且つ人は一切の所有を享樂に變ぜんとするが故に、世界市場の橫溢は到來せぬ。生產と消費とは必然的に平均し、消費は同時に生產と共に發生するものである。併し乍ら、彼れ等の前提は、悟性の承認し得ざる、笑ふべき矛盾に充ちて居る。假りに斯る前提を許すとしても、リカアドオの結論は二個の誤れる假定に基く。先づ、彼れは、各生產物の增加は又收入の增加であると謂ふが、余の見に從へば、其は寧ろ損失を意味し得る。次に、各所得の增加は消費の增加を決定すると謂ふが、この消費の增加は消費數量の增加を意味することなく、極めて屢〻一層高價なる商品の消費となるのである（註一〇〇）。

註九九　Sismondi, Études sur l'économie politique. p. 60-62. 參照。

註一〇〇　Sismondi, Études. p. 62-84. 參照。

斯くして、シスモンディは自己の純理論と政策論との關係を述べ、相對的歷史的關係に於て（註一〇一）社會現象を考察する。

「余は機械の發見、文明の進步に反對するものではない。余は自由競爭のもとに於て勞働者に何等の保證をも與へざる現行社會組織に反對する。……吾人の眼は社會のこの新しき組織、一般的階級鬪爭にのみ注がれる爲め、現實社會以外の存在を認めないのである。人は先行社會組織の害惡を余に示すことによつて、余の不合理を說き得ると信じて居る。事實上、吾々は現實社會に劣るが如き二

三の社會制度を經て來た。然し、斯る制度の下に於て甚しき苦痛をうけたる後今日の社會に進みたるの故を以て、現在の社會組織雇傭制度の正當なる所以を論結することは出來ぬ。奴隷制度、封建制度、ギルド制度の有力なりし時代に於ては、如何なる制度がこれにつゞくかを知ることが出來なかつた。即ち現存組織の改良は不可能であり、又笑ふべきことの樣に思はれたであらう。吾人が奴隷時代を野蠻視すると等しく、新時代のものは、吾人が勞働階級に何等の保證をも與へなかつたが故に、吾人を野蠻視するの時代が疑もなく到來するであらう。……吾人は經濟學者をして、自己の科學の今日迄誤れる道を辿り來れることを知らしめんと欲するものである。併し乍ら、吾人は彼れ等に正しき道を指示するの自信を有しない。社會の現實組織を理解することは出來得る限りの精神的努力を必要とする。現在を理解することにさえ斯くの如き困難あるに、未だ現れざる組織を意識し、將來を洞察することが誰に出來得るであらうか。この故に、吾人は先づ現在社會の分析を遂行せんとするものである」（註一〇一）と。

註一〇一　Rosa Luxemburg, op. cit, S. 186.

註一〇二　Sismondi, Nouveaux principes. 2 éd. tome II. p. 433-448. Études. p. 92-105.

シスモンディに於ては、恐慌は現實經濟組織に於る內在的矛盾より生ずるものであるが、彼れは、其の世界的爆發によつて人類の前史が終末を告げ、收奪者が收奪せらるゝの時が必然に到來するとは考へなかつた。前述の如く、シスモンディは現實社會以外の社會を想定することが出來ぬ。從つて恐慌による現實社會の崩壞は、人類社會其れ自體の日沒である（註一〇三）。即ちシスモンディは恐慌現象を以て現存社會が自ら墓穴を堀りつゝあるの一證左とは見ない。其は病床に於る一個の症狀にすぎぬ。吾人は、全人類の爲めに、其の快癒を祈らなければならないのである。斯くして、彼は社會改良論者となつた。即ち一方に於て、現實社會組織の矛盾を說くと同時に、他方に於て、この矛盾を解決すべき幾多の社會政策を主張した。これが、後年マルクスをして、「シスモンディは、市民的生產の矛盾を的確に判斷しては居るが、其れを理解して居ない」（註一〇四）と稱せしめた所以である。

註一〇三　Marx, Theorien über den Mehrwert. Bd. III. S. 56. マ・エ・全集十一卷七〇頁

註一〇四　Marx, Ebenda, Ss. 55-56. マ・エ・全集十一卷七〇頁

附記　本稿の目的は、正統學派とシスモンディとの論爭を中心として、シスモンディの正統學派批判の態度を明示するに在る。シスモンディは「經濟學の新原理」再版序文に「經濟學の中には、ポレミークな部分があり、この部分は、必然現代と關聯し、近時の事情によつて支持せられ、且つこの事情の變化、發展に從つて變ずべきものである。故に、この種著作の各新版は殆ど必然的に新著作とならねばならぬ」（第一卷十七頁）と謂つて居る。併し乍ら、事實上、この新原理再版と初版の間には左程の變更が無い。唯だ、「批判者としての態度を明示せる重要な經濟理論を一層詳細に論じたる」再版序文十八頁）附錄「生產消費の均衡に關する開明」を卷末に添ふるにすぎぬ。然し、論爭として取扱ふ以上はその對象となつた版本に從ふ必要がある。故に論爭前の說明に於ては、總て「新原理」初版（一八一九年）に由り、且つ參考として再版の說明を附加しておいた。「新原理」出版後の論爭に就ては、其の當時のエディンバラ評論を見ることが出來ぬから、多く、上記の「新原理」再版（一八二七年附錄に依つた。因みに筆者の藏本はこの再版である爲め、初版は之を高橋誠一郎教授より拜借した。特に記して深謝の意を表する次第である。

昭和五年八月十八日稿了